

# 教員育成改革 最前線レポート

ここでは中教審教員養成部会でまとめられている教員の資質能力の向上についての具体的方策を先取りし、すでに改革に取り組んだ先進事例として、「養成」段階では島根大学教育学部、「研修」段階では横浜市教育委員会の取り組みを紹介いたします。

養成

## 学校や地域で行う1000時間の体験学修で 実践力が高くタフな教師を育てる

現代の教師に求められる  
対人関係力や自己深化力も視野に

読者の先生方は、学生時代にどれぐらいの時間、子どもと接し、身体を使って子どもを理解する体験をしたでしょうか。島根大学教育学部の学生の場合、その答えは「1000時間以上」だ。同学部では、学校や地域社会における1000時間の体験学修が卒業要件になっている。教育学部長の小川巖教授はこう話す。

「講義・演習で学んだことを実体験で確かめる。逆に実体験で得た課題を講義・演習で解決する。そうした理論と演習の往還によって教師力をつけさせたいと考えています」

同学部がこのような取り組みを始めたのは2004年。国立大学法人化に

伴う大学改革の動きの中で、いわゆる「ゼロ免課程」を廃止して教員養成に特化した学部として再スタートしたと

改組にあたり、改めて問題となったのが「どういう力をもった教師を育てるか」。議論を重ね、3分野10軸の「目指す教師力」を設定(図1)。学校理解や学習者理解などの「教育実践力」のほか、リーダーシップや社会参加などの「対人関係力」、探求力や倫理観などの「自己深化力」があげられた。科目ごとに育成する教師力を明示。その修得状況を、およそ1年ごとに出力するプロフィールシートで確認する仕組みも整えた。

同時に、この教師力を育成することを目指したとき、「現状の教育実習で本当に十分か」も議論。そこで生まれたのが、1年次から取り組む1000時間

体験学修のプログラムだ。

「今、現場経験の重要性が増しています。その理由の1つは、子どもを取り巻く課題の多様化です。子ども本人の不登校、特別支援、発達障害、言語障害などのほか、多様な保護者に対しても細やかに対応していかなくてはなりません。もう1つ、今や学校は、教員のほかさまざまな専門家とチームで取り組むもの。異なる立場の人とも協働していく力が求められます。大学卒業後すぐ「教師」としてこうした状況に対応していくには、学生時代に十分な実践力を磨いておく必要があるでしょう」(小川学部長)

ポイントは体験先の多様性と  
事前・事後学修の充実

同大学の体験学修1000時間のう

### 島根大学 教育学部



教育学部附属  
教育支援センター長  
川路澄人先生



教育学部長  
小川 巖先生

ち600時間は全員共通の必修体験、残り400時間は学内外から募集されるさまざまな体験活動の中から各自が選択するものだ。多くの学生が規定時間を100時間以上超過して、自主的に体験活動に励んでいるという。

この体験学修の特徴は、時間数の多さだけではない。まず、学校以外に多様な体験先を用意している点が目を引く。体験学修を担当する教育支援センターのセンター長、川路澄人教授はこう語る。

「子どもは学校だけで育つわけではなく、地域社会や家庭のさまざまな人間関係のなかで生きています。そうした幅広い視野をもって子どもと接する教師になつてほしいと考えています」

体験領域は大きく3つ(図2)。1つめは、学童保育の活動支援、キャンプ指導補助、地域イベントの支援、放課後学

図1 島根大学が目指す教師力の軸

教育実践力	学校理解	学校での教育実践を広く社会的な制度や歴史の中に位置づけてとらえたり、授業や一人ひとりの子どもへの指導の基礎となる学級を経営したりすることができる。
	学習者理解	一人ひとりの学習者の特性に沿った必要な支援を行ったり、発達段階をふまえた指導を行ったり、学びを深め合う学習集団を組織したりすることができる。
	教科基礎知識・技能	各教科等の指導内容や、その基盤となる専門領域に関する知識や技能を身につけている。
	授業実践	的確な教材分析をふまえて授業を構想・実践したり、授業をふりかえって評価したりすることができる。
対人関係力	リーダーシップ・協力	大学における学習・研究や体験学修、社会参加など、集団活動の場面において、リーダーシップをとったり、協力したりすることができる。
	社会参加	社会的な要請や自己の関心・専門性に応じて、社会的な活動に参加することができる。
	コミュニケーション	子どもと関わる場面や社会的な場面、研究的な場面のそれぞれにおいて、相手や目的に応じて、適切なコミュニケーションを行うことができる。
自己深化力	探求力	自己の興味や関心にしたがって、専門的な領域や特定の問題についての問題意識や知識・能力を深めることができる。
	教師像・倫理	社会人としての人間観・倫理観を基盤としながら、教師として特に必要な倫理観や理想とする教師像を持ち、それらに照らして日常的教育実践をとらえることができる。
	リテラシー	社会的あるいは専門的な情報について、様々な方法で受容したり発信したりすることができる。

習支援など、学校以外の教育活動に参加する「基礎体験領域」。2つめは、附属幼稚園・小学校・中学校での教育実習を中心とした「学校教育体験領域」。小中一貫校のような新しいタイプの学校が増えるなか、校種間の接続をふまえた指導ができるよう、希望する校種以外の学校での体験も推奨している。そして3つめは、いじめや不登校、学級崩壊などの教育的課題をふまえ、カウ

図2 1000時間体験学修の領域と時間

	必修	選択	
基礎体験領域	110時間 入門期セミナーI、II／介護等体験／基礎体験セミナー（スタートアップセミナー、基礎体験交流会、充実期セミナー、応用期セミナー、発展期セミナー）		400時間
学校教育体験領域	340時間 学校教育実習I～V／学校教育実践研究I、II		
臨床・カウンセリング体験領域	150時間 生徒指導・進路指導・保護者支援／子ども理解・学級集団の形成／特別支援教育相談		

ンセリングや教育相談などの実習を行う「臨床・カウンセリング体験領域」だ。また、体験そのものだけでなく、その事前・事後指導が充実にしていることも大きな特徴だ。体験の前には活動の目標を確認し、事後の振り返りでは学生同士が体験を共有し今後の課題を確認する。「体験学修では、思いどおりにいかないことや失敗することは日常茶飯事。それをそのままにせず定期的に活動を振り返り、こういう場合はどう対応したらいいか、こうならぬためにどんな力を磨いたらいいかを考える機会を設けています」（川路センター長）

「うまくいかないこともある」と  
知ったうえで学校現場に入る

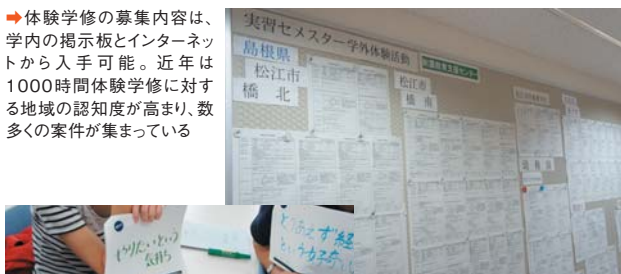
卒業生が教員として赴任した学校からは、彼らの実践力を高く評価する声が聞かれるという。例えば、「子どもとの間に壁を作ることなく、スムーズにクラス運営が始められる」「最初から受容的態度や共感的理解ができて」「保護者の話を聞くのがうまい」といった具合だ。

「もちろんすべてがベテランの先生のようにうまくいくわけではありません。ただ、彼らは体験学修で数多くの失敗をし、うまくいかないこともあるというこ

とを知っています。その場合どうしたらいいか、繰り返し考えてきた経験は、新米教師の大きな財産でしょう」（川路センター長）

このように充実した体験学修のプログラムは、「島根大学だけの特別な例」だろうか。今、必修とはいかないまでも、他大学でも学校現場に入る機会を増やす動きが活発になっている。中教審の答申素案では、「学校インターン」を教員免許の単位として認める方針が示された。今後、教員養成課程を経て、子どもを取り巻く幅広い環境を知り、教育実践力を磨いてきた教師が学校現場に増えていくかもしれない。

▶ 体験学修の募集内容は、学内の掲示板とインターネットから入手可能。近年は1000時間体験学修に対する地域の認知度が高まり、数多くの案件が集まっている



▶ 定期的に体験学修を振り返るセミナーを実施。「体験学修に取り組む原動力は？」「体験先で評価してもらった自分の強みは？」などをグループで話し合う

▶ 独自の多角的評価システムによって出力されるプロフィールシート。学習全体の評価のほか教職教養、専攻、体験学修（必修）、体験学修（選択）の各分野について、教師力10軸の到達状況がリーダーチャートで確認できる

